

3 Diabetes in China and Japan

劉 大娜・宗田 聡*・岸 裕太郎*
安部 正夫*・佐藤 隆明*

ハルピン市第一医院 内分泌科
新潟市民病院 内分泌・代謝内科*

糖尿病は世界的に患者数が増加しており、特に中国では2015年時点で推定患者数は1億5千万人、小児糖尿病は約3万人いて、国民の医療費の12%を占めています。今後患者数のさらなる増加や疾患の発症率の上昇が予測されています。糖尿病のコントロール状況は、HbA1c < 7.0%達成の割合は44.9%と低く、また血圧や脂質管理を含めたリスクファクターの管理目標を達成している割合は7%未満です。その結果6秒間に一人の糖尿病関連死をもたらしています。その原因として肥満患者の増加にあります。糖尿病対策は重要な問題であり、今回新潟市民病院の研修を通して中日国間の違いを感じました。特に食文化の違いや医療保険制度の違いから患者教育の方法や考え方に興味を感じました。今後の中国における糖尿病診療の参考になるものと考えました。

4 GLP-1 受容体作動薬の使用で尿蛋白が寛解に至った2型糖尿病合併IgA腎症の1例

蒲澤 秀門¹⁾・和田 恵梨²⁾・桑原 頌治²⁾
石川 友美³⁾・細島 康宏¹⁾・悴田 亮平³⁾
山崎 肇⁴⁾・鈴木 芳樹⁵⁾・斎藤 亮彦²⁾
成田 一衛³⁾

新潟大学医歯学総合研究科
病態栄養学講座¹⁾
同 機能分子医学講座²⁾
同 腎・膠原病内科³⁾
長岡赤十字病院 内科⁴⁾
新潟大学保健管理センター⁵⁾

症例は34歳、女性。21歳時腎生検にてIgA腎症と診断された。プレドニゾロンにて治療され、血尿は消失も尿蛋白は1g/gCre程度残存した。28歳時糖尿病と診断され内服治療、30歳時の妊娠時には一時的にインスリン管理された。出産後体

重増加とともに血糖値が悪化し、34歳時シタグリプチン50mg、グリメピリド0.5mg使用で体重85.0kg、BMI35.4kg/m²、HbA1c8.0%で、尿蛋白は0.88g/gCreであった。シタグリプチンをリラグルチドに変更し、6ヶ月後HbA1cは7.8%であったが、尿蛋白が0.18g/gCreまで減少した。今年発表されたLEADER試験はリラグルチドの血糖降下作用、心血管イベントの抑制効果とともに、腎の保護効果を示唆する結果であった(NEJM2016)。本症例と我々の基礎研究データも交えリラグルチドの腎保護効果の可能性について考察する。

5 プロラクチン産生下垂体腺腫の手術治療例

米岡有一郎・西巻 啓一*・丸屋 淳*
田村 智*・熊谷 孝**・菅井 努**
根路銘千尋**・太田 智慶**
井上 明**

新潟大学医歯学総合病院
魚沼地域医療教育センター
脳神経外科
秋田赤十字病院 脳神経外科*
山形県立中央病院 脳神経外科**

【緒言】プロラクチン産生下垂体腺腫(PRLoma)はドパミンアゴニスト(DA)による薬物療法が第一選択であるが、手術適応例は依然存在する。自験2症例を供覧する。

【症例提示】

〔症例1〕21歳、女性。13歳初経時より月経不順(不規則、稀少)。20歳になり、月経不順を主訴に近位産婦人科を受診、高PRL血症(121.1ng/ml)を指摘。MRIでトルコ鞍内前葉の左側に微小腺腫を認めた。DA内服不可にて経鼻摘出。術後8日のPRL0.86ng/mlで、乳汁分泌減少。術後9日で独歩退院。

〔症例2〕28歳、女性。26歳に無月経、PRL580ng/ml。DA内服も、PRL50-70mg/mlで推移。月経再来も無排卵性。拳児希望あり。海綿靜脈洞浸潤を伴うPRLomaと診断し経鼻摘出。術後3日目のPRL10.86ng/ml。下垂体予備能良好で術後11日で独歩退院。